

## マタイによる福音書 2:1~12

先週の木曜日、主イエスが天に上げられたことを記念する昇天日を迎えました。そして、この朝、復活節第七主日の礼拝を守る私たちは、来週には、聖霊が弟子たちの上に臨み、主の教会が地上に立てられたことを記念するペンテコステの礼拝を共にすることになるわけですが、主イエスが天に昇る様をじっと見つめていた弟子たちに向かって、白い服を着た天使たちが語ったことが次の言葉でありました。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げているのか。あなた方から離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなた方が見たのと同じ有様で、またおいでになる」と、使徒言行録1章11節には、その時の弟子たちの様子をこのように記すのですが、天使たちからそのように言葉をかけられたところに、昇天日から聖霊降臨の出来事までの間の弟子たちの気持ちが表されているように思います。そこで、私たちは、では、この朝をどのような思いで迎えたのでしょうか。そして、その私たちに今日の御言葉は何を語りかけようとしているのでしょうか。

教会暦に従いつつも、しばらくの間、聖書日課を離れ、私たちはマタイによる福音書を一から共に聞いていこうとしているわけですが、その私たちに与えられたこの日の御言葉は、例年ですと、降誕節第一主日に聞いている御言葉です。それが、この東方の三人の博士の話ですが、それゆえ、真冬のかき氷のように、どうしても季節外れの感が否めません。どうしてもこの時に、と思わずにはいられないからです。ですから、先ほど、この朝をどのような思いで迎えたのかと、また、今日の御言葉から何を聞いていけばいいのかと、こう皆さんにお尋ねしたばかりでもありますので、いささかちぐはぐな感じもいたします。それゆえ、「東方の博士のように黄金、乳香、

没薬をイエス様に献げましょう。それが私たちの信仰です」と皆さんに申し上げるのは、いささか強引なようにも思うのです。なぜなら、天に昇るイエス様をじっと見つめ、それゆえ、日曜日の朝、その気持ちを引きずったままを迎えることになったのがイエス様の弟子たちであるからです。ですから、その弟子たちが今日の御言葉に聞いたとするなら、きっと、献げものをしたくても、どこにおけばいいのかわからない、その時の弟子たちの気持ちはそんな気持ちであったのではないかと思います。ただだから、弟子たちは、心を合わせて熱心に祈った、つまり、祈らざるを得なかったのがその時の弟子たちであったということです。

けれども、そういうところでの一致は、いささか心許ないようにも思うのです。大きな課題が共有できている間はいいのですが、問題が解決したり、また、解決を見ないときにはどうなってしまうのかと思うからです。そして、人のするところには往々にしてそういうところがあり、ですから、そうなってしまうと、人は安心して祈らなくなるか、あるいは、信仰どころではなくなってしまうか、いずれにせよ、その時の安心も、そして、不安や恐れも、御言葉が私たちに伝え、また求めるところではありません。ですから、そういう意味では、やはり、東方の三人の博士の振る舞いからは学ぶところは大きいようにも思うのです。ただし、そこで私たちが何を学ぶべきかは、三人の博士だけを見ているだけでは少しわかりにくいようにも思います。なぜなら、私たちはどうしても三人の博士のように、それをするとかしないとか、というところから、この物語を見てしまうからです。ですから、そうなる、結局は、先ほど申し上げた安心と不安を行ったり来たりするだけになってしまいます。できる場合もあればできない

場合もあるし、また、したいこともあればしたくないこともあるからです。けれども、御言葉が私たちに伝える信仰とはそういうものではありません。極端な話、底が抜けても笑っていられる、御言葉が私たちに語る信仰とはそういう信仰であるからです。

そこで、今日私たちに与えられている御言葉を見て参りますと、そこで何が見えてくるのか、先ず言えることは、この物語の中心は三人の博士でもなく、もちろん、ヘロデでも、エルサレムの人たちでもない、11節に「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた」とあるように、物語の中心は、幼子イエスであるということです。それゆえ、ここに記されていることは分かりやすいと言えるのでしょうか。しかも、ルターがこの三人の博士がイエス様に献げた黄金、乳香、没薬を、信仰、希望、愛に置き換えて説明しているわけですからなおのことだと思います。それゆえ、三人の博士の振る舞いは、信仰者の一つの雛形だとも言えるのでしょうか。つまり、お手本のようなものであるということです。ですから、クリスマスには、私たちは、毎回、このお手本に聞いているわけですから、さぞやこのお手本が身についているだろうと、人はそう思うことでしょうか。ところが、それが身についたとの実感については少々心許ないところがあります。まただから、繰り返し、聞いていく必要があるのでしょうか、けれども繰り返す内にだんだん慣れてしまっているところはないのでしょうか。ただ、信仰が人間の営みである以上、この慣れの問題はどうしても否定することはできません。では、慣れずに、いつも新鮮な気持ちでいつも御言葉に聞いていくためにはどうすればいいのでしょうか。三人の博士の姿は、実は、そういう意味で大切なことを私たちに教えてくれているのです。

ところで、太陽はどちらから上るものなのでしょうか。答えは東から、ということですが、このことはつまり、主の復活は東から起こるということです。それゆえ、古い教会の礼拝堂の正面は東を向いていることが多いのですが、ところ

が、三人の博士がやって来た方向は、イエス様を礼拝すべき方向からすれば、正反対の方向であったということです。このことはつまり、既成概念、固定観念に縛られることなく自由に振る舞っているのがこの三人の博士たちであるということです。では、それに対して、ヘロデはじめ、エルサレムの人々はどうであったのか。既得権、既成概念に縛られていたため、イエス様の誕生を自らの立場を脅かすものと考えてしまったわけです。従って、イエス様の誕生を巡っての三者三様の振る舞いは、既成概念の内側に止まるのか、それとも、その外に向かうものなのか、この違いによるものでもありませんが、ただし、この違いは、内側に籠もるか、それとも外に飛び出すかだけに止まるものではありません。三人の博士が向かった先は、既成概念の外であります。博士らがひれ伏し、黄金、乳香、没薬を献げたお方の偉大さが分かるには、将来を待たねばなりません。そのお方はきらびやかな王宮を住まいとする方ではなく、若い貧しい夫婦の間に生まれた方であったからです。

このように、本来向かうべき方向ではなく向きを変え、それも、大きなものではなく、小さいものを目指して進んでいったのが三人の博士たちでありました。従って、クリスマスにこの物語が取り上げられるのは、単にイエス様が生まれたかどうかということだけが重要であるからではありません。この向きを変えたというところに、私たちにとっての大きな意味があり、そして、それは、御言葉がイエス様という良き訪れを語る上で「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と語るように、福音を信じるためには、方向転換を意味する悔い改めが欠かすことのできないものからです。それゆえ、悔い改めによって始まり、悔い改めに終始するものが私たちの信仰であると言えるのですが、従って、三人の博士のしたことの意味は、その大胆な行動と献げものの大きさではありません。その中心にあるのは、その悔い改めがそのように彼らをしてそう振る舞わせたということです。けれども、へ

ロデはじめ、エルサレムの人々は違いました。自分たちのやって来たこと、考えていることに囚われ、向かうべきところに向かうどころか、それ自体をなかったことにしようとしたのです。御言葉は彼らのその罪をここで明らかにするわけですが、その罪とはつまり、神様の御心に背を向けたということです。それゆえ、そうならないためにも、私たちは一生懸命悔い改めなければならないのですが、確かに、私たちが日々の生活に胡座をかいたり、無精するようでは、悔い改めの果実が、自分事として身に備わることはありません。それゆえ、そういうところには、生き生きとした信仰生活も、信仰の喜びも、まったく期待できないことにもなるのでしょうか。けれども、悔い改めに励む、一生懸命に悔い改めるというのは、その意図するところは分かるのですが、御言葉はそもそものところで私たちにそれを望んでいるのでしょうか。ここでの三者三様のあり方を見ていると、確かにそんな気にもなるのですが、本当にそうなのでしょうか。

悔い改めという言葉は、辞書にもあるように日本語として定着し、その意味は、自ら犯した過ちを反省し、心を入れ替えるということです。つまり、後悔と反省、それが自分自身を変える切っ掛けになるということです。けれども、御言葉が私たちに語る悔い改めは、変わるべき契機を自分自身の中には求めません。そういう意味で、キリスト教用語でもあるこの悔い改めという言葉は未だ熟し切れていないと言えるのでしょうか。では、この悔い改めという言葉をも自分自身で咀嚼し、よく練った言葉として用いるためにはどうしたらいいのか。悔い改めというとき、そこには確かに後悔と反省が伴うものでもあります。悔い改めとは、聖書においては、方向転換することです。つまり、自分のすべてを神様の方に向けるとのことです。ですから、それは、自ずと生活全般が変えられることにもなるのですが、それも、断捨離をするかのように、自分で何かを変える変えないということではありません。そういう、心を入れ替えるだけの部分的

なものではなくて、身も心も、自分のすべてを神様の方にも向き直す、悔い改めというのはそういうものでもあるのです。ですから、そういう意味で、三人の博士たちの振る舞いは、大きく方向転換をしたと、そのように言えるのですが、それゆえ、そこに私たちが見習うべきもの、学ぶべきことが現されていると言えるのです。ところで、そこでよく考えていただきたいのですが、このような大きなことを、私たちが果たして自分の努力によって本当に身につけることができるのでしょうか。

福音を信じることの前提として悔い改めは語られているのですが、そのため、私たちは悔い改めをあたかも信仰の条件のように考えてしまうのです。しかし、それには前提があるわけです。それが「時は満ち、神の国は近づいた」ということです。つまりは、この三人の博士の物語は、この「時は満ち、神の国は近づいた」ことを私たちに伝えてくれているということです。まただから、三人の博士たちは方向転換をして、既成概念の外に向かって、大胆に進むことにもなったわけですが、ただし、そこで忘れてはならないことがあります。それが彼らの振る舞いの前提となっている「時は満ち、神の国は近づいた」というこの事実であるわけですが、そこで、この「時は満ち、神の国は近づいた」ということを別の言い方をするとどうということになるのでしょうか。それは、難しい話ではありません。私たちが向きを変える変えないという以前に、神様の方が私たちの方に向きを変えてくださって、私たちを迎えるために御子を、神様に背を向ける私たちの許にお遣わしくくださったということです。つまり、先ずこのことに気がつき、素直に向きを変えたのが三人の博士たちであり、ヘロデはじめ、エルサレムの人々はそうではなかったということです。従って、そういう意味では、悔い改めも、私たちの信仰も、私たち自身の努力の賜物などではなくて、神様からのプレゼント、恵みということなのです。

そして、そのことに加えて、私たちが心に留めるべきことがもう一つありま

す。それは、このイエス様の誕生によって変わったものは、人間だけではなく、この世界がイエス様の誕生によって変わったということです。なぜなら、先ほども申しましたように、私たちが心を入れ替えたから、だから、神様が私たちの方を向いてくださったわけではないからです。神様が私たちと私たちの生きるこの世界に向き合ってくくださったから、だからこそ、この神様の方に私たちはその姿勢を正すことができるのです。ですから、三人の博士とヘロデはじめエルサレムの人々との違いは、行動の違いではなく、それぞれの世界の捉え方の違いであるということです。そして、この違いをお伝えしたく、説教題を「大きく手を伸ばして」としたわけですが、それは、今日が主の昇天日の後の主日であるからです。つまり、世界の歴史が神様によって大きく方向転換することになった今、私たちはどこに向かって大きく手を伸ばせばいいのかということです。大きく手を伸ばすというと、普通に考えれば、天に向かって飛び上がらんばかりに、何かをつかもうとすることでもあるのですが、では、このことと、財産や地位や名誉を求めることと、一体何が違うのでしょうか。つまり、天を仰ぎ、そこから何か落ちてくるのを待つのが悔い改めるということであり、それを信じて待ち続けることが私たちの信仰なのか、ということ。もちろん、そうではない、ならば、そうでないならどうなのか。

世界が変わったということは、その中に生きるすべての者が変えられたということです。それゆえ、その中には、三人の博士だけでなく、ヘロデもエルサレムの人々も、そして、私たちも、すべてがこの変わった中を生きているということです。ただし、すべての者がそれに気がついてはいるわけではありません。ヘロデがイエス様の誕生を理解しながらも、なお、神様の方に向かうことができなかつたように、ヘロデが非情な振る舞いを平然とやってのけたのはそれゆえのことです。では、私たちはどうでしょうか。もちろん、ヘロデのような非情な

振る舞いをすることはありません。けれども、完全に、正しく、神様の方を向いていると、神様の方だけを見ていると、果たしてどれほどの人が胸を張って言葉にすることができるのでしょうか。そして、その中の一人が私でもあります。では、それはどうしてなのか。一つには、悔い改めが足りないからとも言えるのですが、けれども、先ほども申しましたように、悔い改めとは、一生懸命するものではありません。神様ご自身が私たちに近づいたということはつまり、世界は、神様から決して遠いものではなく、すでに近くにあり、つまりは、心を入れ替える入れ替えない以前に、自分が今神様から近いところに生きている、置かれているということです。ですから、それが分かれば、私たちの目はどこに向かうのか、つまり、それが悔い改めということ。す。

しかし、悔い改めは、近くにいます神様に目が開かれるゆえに己の罪を知ることでもあります。それゆえ、少々痛い思いをすることにもなるのですが、けれども、その私たちと神様は共にいてくださっているわけ。この神様への気づきはそのままでは終わらない、そこには当然喜びと感謝が生じることになるのです。従って、悔い改めとはつまり、私たちの心を暗く沈ませるものではなく、神様の恵みを受けて日々生きることへの気づきが与えられることであり、その気づきこそが、目の前にあるイエス様であるということです。ですから、その私たちの日々暮らしを維持するに必要なことは、私たちがぴょんぴょん跳び上がって、その手で抱えきれない何かを抱え込むことではありません。自分置かれているところに共にいますイエス様を見つめながら、日々歩むということであり、そこに喜びと平安があるということです。まただから、三人の博士たちは守られ、来た道を帰って行くことができたわけです。祈りましょう。